

入試で4技能を測ることができるのか

青木栄一

Aoki Eiichi
(東北大学准教授)

マジックワードとしての高大接続

大学入試と高大接続の違いがよくわからない。中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について一すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために一」が2014年12月22日に出され、翌2015年1月16日に「高大接続改革実行プラン」が策定された。この答申やプランには高大接続の定義がどこにも記されていない（もちろん「読解」すればなんとなく意味するところはわかった気にはなるが）。同年2月24日に「高大接続システム改革会議」が設置され、2016年3月31日に「最終報告」がまとめられた。そして「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」検討・準備グループの検討を経て「大学入学共通テスト実施方針」が策定され、大学入試センター試験が大幅に見直されることとなった。

英語教師にとって重要なのは、この大学入学共通テストにおいて4技能評価へ転換が図られたことである。たしかに4技能は英語教育にとって重要だろうが（折しも2014年9月26日に英語教育の在り方に関する有識者会議が報告をまとめた）、それを入試で測定するべきなのか、あるいはどう測定するかは別問題であるはずだろう。ところが、4技能の測定が前提条件となり、4技能をセンター試験のスキームで測定できないという理解のもとで民間の英語検定試験を活用（流用）することとなった。参加希望を募り（2017年11月24日～12月20日）、2018年3月26日に大学入試センターにおいて参加要件を満たす8つの資格・検定試験が公表

された。スムーズな政策決定である。

世界に誇るべき日本の大学入試

ところで、日本は少子高齢化社会とはいえ、人口規模は世界的に見て大きな国家である。OECD加盟国のなかでアメリカ、メキシコに次いで3位である。こういう国家でセンター試験のようなスキームが毎年大きな混乱もなく続いていることが奇跡的である。その裏には関係者（入試業務の素人である大学教員が大部分を占める）の涙ぐましい尽力がある。センター試験は直近で58万人が出願する。リスニングは機器を用いて行われるが、エラーが1つ2つあっても不思議ではない。エラーレートでいえば0.01%で58件である。機器の操作というヒューマンエラーも想定しなければならない。同一時刻にこれだけの規模の入試が滞りなく行われることを報道するべきである。そういう巨大規模の入試で4技能を測定しようとするのはロジスティクスの発想を欠いている。日本の教育関係者が大好きなフィンランドの大学入学資格試験は受験者数の多い教科で1回当たり7,000人である。両国を比較しようとする事自体無理がある。

民間資格・検定試験を活用する際には留意すべき論点が多々存在する。影響は大学、高校の教員、学生・生徒に及ぶ。これらの主体が支払う追加コスト（時間、金銭）は政策決定では考慮されない。スムーズな政策決定の背景にはこうした資源制約の無視が横たわる。

英語教師こそ業務の省力化をして留学を！

とはいえ、大学受験という学校教育の最大の規定要因が大きく変わることは決まった。4技能を意識した授業や教材が必要となってくる。むやみに焦る必要はない、と読者には注意喚起したい。これまで以上に資格・検定試験の教材と教科書が似通ってくるだろう。そうなれば教材作成の手間も省けるし、学期末テストだって資格・検定試験を「活用」すればよい。事実上の外注である。そして英語教師は授業準備や教材作成や採点を省力化すればよい。そして生まれたゆとりの時間を英語教師としての自分磨きに充てればよい。東京都では英語教師の2か月ほどの海外派遣制度があるが、こうした恵まれた制度がなくても積極的に海外に短期留学をしてみてもはどうだろうか。